

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370514

研究課題名(和文) 石川県輪島市海士町方言の調査研究

研究課題名(英文) Research on the Ama-machi dialect in Ishikawa Prefecture

研究代表者

新田 哲夫(Nitta, Tetsuo)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90172725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間を通じて、福岡県宗像市鐘崎から移住し、閉鎖的な社会を保ってきた輪島市海士町の「言語の島」の様子について、海士町のルーツ問題、アスペクト形式「ヨル」、語末母音と助詞の母音融合、アクセント体系、人称詞等について、考察を行った。移住と言語の関係について、ルーツの側の言語がどんどん変化していく一方で、移住先の言語がむしろ古形を保存する興味深い現象が見られた。その一方で能登方言の特徴を取り込みながら、閉鎖的な社会の中で独自の变化を遂げた特徴の存在も明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Residents of Ama-machi in Wajima City are said to immigrate from Kanazaki in northern Kyushu in the late 16th century. Their dialect is different in many ways from the dialects of the surrounding Noto area, and is attractive to linguists as a subject of studies on the relation between language changes and its settlement. This dialect shows some common characteristics to one of northern Kyushu which is the putative homeland of the residents. This survey reveals the manifestations of the 'island of language' of Ama-machi with regard to the issue on their homeland, the aspectual form 'yoru', the vowel coalescences, the accent system, and the pronoun of this dialect.

研究分野：言語学

キーワード：海士町方言 言語の島

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象となる、石川県輪島市海士町は、輪島の市街地の北方、輪島港に面した集落で、面積約1千坪の中に世帯数200戸、約700人弱が住む。家屋が密集し、隣り合う輪島崎町(わじまざきまち)、鳳至町(ふげしまち)と連続している。この土地は慶安2年(1649)に加賀藩より拝領したもので、それまで定住地を持たない漁民が、加賀藩へアワビ等の海産物を献上する見返りに、この地に住むようになった。48km沖合の舳倉島周辺の漁業権を独占し、春期末には住民挙げて舳倉島に移動して夏期を漁で過ごし、秋期には「灘廻り」と称する行商での船上生活、冬期には海士町で暮らすというパターンを長年続けてきた。そうした特殊な生活形態が周囲の輪島との交流を遠ざけ、閉鎖的な社会を形成するに至った。そのことが原因で、出自と目される九州筑前の言語特徴を色濃く残していたのである。しかしながら、こうした生活形態は近年崩壊し、海士町の言語も次第に“輪島化”あるいは共通語化しつつあると考えられる。また、伝統的な話し手は高齢化し、その数は減少している。

海士町方言は、石川県では、白峰方言と並んで、もう一つの「言語島」でありながら、岩井隆盛の研究以来、本格的な調査は行われなかった。調査研究が停滞していた原因の一つは、外部の人間との交流を厭う社会の閉鎖性にあり、協力者が得にくい状況があった。しかしながら、最近、海士町の住民のなかに、海女の文化的価値を見直す機運が生まれ、舳倉島の海女や漁民の生活誌を記録する試みが一部で行われるようになった。こうした住民意識の変化があり、今後の言語調査に関して、海士町自治会の全面的な調査協力を得るに至った。

海士町住民は、自身のルーツの問題について、高い関心を寄せている。方言の研究によって、その問題の解明につながる糸口を得ることができれば、学術研究が住民にも寄与することになる。また、海士町方言の研究は、日本では数の少ない移住と言語の関係に光をあてるものである。海士町のように400年近い時間が経過した現在も、言語特徴が残存するのは極めてまれなケースである。移住による言語変化で、どのような特徴が保存されるのか、またどのような特徴が消えるのか確認ができる。

以上の観点から、輪島市海士町を調査地を選び、言語の記述に着手することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、石川県輪島市海士町(あままち)の言語について、徹底した記述を行い、言語資料の音声・テキスト等を作成することにある。海士町住民の出自は、筑前の鐘ヶ崎にあり、永禄年間(16世紀)に能登に漂着したとの伝承がある。実際、言語は能登周辺とは大きく異なり、一部九州方言と共通性が見られる。ただ、その全貌は明らかになっ

ておらず、伝統的な方言の話者数は減少の一途である。海士町方言は知られざる危機方言の一つと言え、徹底した記述が喫緊の課題である。この研究によって、体系記述を行うとともに特異性を明らかにし、ルーツの問題の決着に迫る。

3. 研究の方法

主に現地調査による。高齢層の相手に録音を取りながら、用意した調査項目に答えてもらう現地調査としては一般的な方法である。調査対象地の輪島市海士町のほか、母村と目される福岡県宗像市鐘崎においても現地調査を行った。

4. 研究成果

【概要】

研究期間を通じて、福岡県宗像市鐘崎から移住し、閉鎖的な社会を保ってきた輪島市海士町の「言語の島」の様子について以下の点が明らかになった。1) 海士町のルーツ問題については、宗像鐘崎(九州北部)の共通性が中間の他の地域に見られないことから、宗像ルーツ説は、言語の側から支持される。2) アスペクト形式「ヨル」は、能登地方では輪島市海士町以外には見られず、移住によって持ち込まれたと推定されるが、海士町の「ヨル」は、現在確認できる動作動詞の継続を表す意味に用法が狭まりつつある。3) 語末母音と助詞の融合現象が激しいが、能登に移住してから発達したと推定される。4) アクセントは能登式から発展した東京式に似たタイプであるが、語末の母音の広狭が関係する。5) 人称詞については、人の交流が激しい宗像市鐘崎が新しい体系をもち、移住していった海士町の方が古形を残している。

移住と言語の関係について、ルーツの側の言語がどんどん変化していく一方で、移住先の言語がむしろ古形を保存する興味深い現象が見られた。その一方で能登方言の特徴を取り込みながら、閉鎖的な社会の中で独自の变化を遂げた特徴の存在も明らかになった。

【音韻】

海士町方言の音声・音韻の特徴をあげる。

(1) ガ行鼻音

海士町方言では語中のガ行音は非鼻音である(「鏡」[kaami])。能登・加賀地方全域が鼻音[b̥]で発音される([kanami])のと対照的である。

(2) セとゼ

標準語でいうセ、ゼは、現在シェ、ジェと発音されることはない(例:「背中」セナカ、「税金」ゼーキン)。

(3) 合拗音

いわゆる漢字音から生じた「合拗音」kwa クワ、gwa グワは、聞くところが出来なかった。能登・加賀の明治大正生まれの世代では、「火事」をクワジ、「外国」をグワイコクと発音していたが、現在の海士町では聞くことができない。(例:「火事」カジ、「外国」ガイコク)

(4) 「広母音化」

標準語「い、ひ」に対応する語頭音が広母音化(イ エ、ヒ ヘ)して現れるものがある。

(4a) 語頭の「い」 エ 例：エカ「烏賊」_カ、エケル「生きる」_カ、エソ「磯」_カ、エトコ「従兄弟」_カ、エニ「犬」

(4b) 語頭の「ひ」 ヘ 例：へザ「膝」_カ、へジ「肘」_カ、へダリ「左」_カ、へシャゲル「ひしゃげる」_カ、へツツク「引っ付く」_カ、へドイ「ひどい」

(5) 語彙的なシ

一方標準語の「ひ」は、シでも現れる。語彙的に限られた単語にしか現れない。

語頭の「ひ」 シ 例：シト「人」_カ、シトリ「一人」_カ、シトツ「一つ」_カ、シカリ「光」_カ、シガシ「東」

(6) 連母音

(6a) 海士町方言で顕著な音声の特徴は、母音の連続による融合の現象である。アイ ai、アエ ae の連続はほとんど融合してエー ee になる (ai > ee, ae > ee)

「浅い」アサイ > アセー asai > asee (cf. 「遅い」osoi)

「在郷(田舎)」ザイゴ > ゼーゴ zaigo > zeego

「船頭(タイシ男)」タイシオトコ > テーシオトコ taisi-otoko > teesi-otoko

「さざえ」サザエ > サゼー sazae > sazaee

「前掛け」マエカケ > メーカケ maekake > meekake

(6b) 助詞の =a 「は」(トピック) =i 「へ」(方向) =o 「を」(対象) と盛んに融合する。この方言では、方向を表す助詞「へ」のほか、到着点を表す助詞「に」の意味に対応する助詞として、=i イを用いる。

	a 「は」	i 「へ」	o 「を」
nna 「あなた」	nnaa	nee	nnoo
esi 「石」	esjaa	esii	esjoo
are 「あれ」	arjaa	arii	arjoo
nado 「あなた方」	nadaa	nadoi	nadoo

nnaa 「あなたは」など、aa のように長母音の表記をしているが、実際は短母音より少し長いか短母音と同じ長さである。

【アクセント】

能登地方のアクセントは多様な分布を示すが、海士町のアクセントはいわゆる東京式アクセントの亜種である。2拍名詞のみ例としてあげる。太字の拍が高い。

表 -5-1: 海士町方言のアクセント

第1類(庭、道、水)	ニワ ニワガ ニワカラ
第2類(川、音、夏、紙)	カワ カワガ カワカラ (広)
第3類(山、島、耳、足)	ナツ ナツガ ナツカラ (狭)

第4類(舟、糸、海)
第5類(雨、猿、窓、秋、春)

フネ **フネガ**
フネカラ

類別語彙の統合に仕方は、概ね1類 / 2・3類 / 4・5類と分かれ、第2類と第3類の区別、第4類と第5類の区別がない。また、第1類は平板型、第4・5類は頭高型である。これらの点、東京式と同じである。しかし、第2・3類のうち、2拍目の母音が狭い(i, u)ときは、下がり目(アクセント核)が1拍後ろにずれる。母音が広い(a, e, o)ときはずれない。この点が東京式と異なる。

カワ(川) **カワガ**アル(川がある)
 カワカラデル(川から出る)

ナツ(夏) **ナツガ**クル(夏が来る)
 ナツカラセル(夏からする)

ミミ(耳) **ミミガ**アル(耳がある)
 ミミカラダス(耳から出す)

「夏が来る」の「来る」のアクセントは**クル**であるが、**ナツガ**のあと、低く抑えられる。もともとあったナツのツの後の下がり目が、後ろにずれてガの後にきたものである。「耳」の例も同様である。

能登と加賀の主要な方言では、第2・3類のうち、母音が狭くかつその拍の子音が有聲子音であるとき、**ミミ**(耳)、**カミ**(紙)、**ヒル**(昼)、**ニジ**(虹)のように頭高型で現れるが、海士町方言ではそのようにならず、これらの母音の狭いために下がり目が後ろにずれるだけである。

【人称詞】

人称詞の体系を取り上げる。人称詞のうち、3人称は日本語一般では通常、コレ、アレヤコノヒト、アノヒトなど指示詞を伴った形で現れるので、人称専用の1人称と2人称を扱う。

海士町方言の2人称では、相手に対する敬意があるなしで形が異なっている。尊敬の形式には2種類あり、ワ系を尊敬(尊)とし、コナタの指示系を尊敬(尊)とし、その他敬意を含まないものを非尊敬(非尊)とした。

形の上から、-aでおわるA形とそれ以外の非A形に分ける。A形と非A形の両方をもつもの(例：オラとオレ、ナドマとナドモなど)については、A形は非A形から生まれたものと推定する。すなわち、トピック(話題)を表す助詞 =a 「～は」が付いてでき上がった形が、トピックを表さない単独の場合でも用いられるようになったという推定である。

ore=a > oraa > ora

ora-domo=a > oradoma

nna-domo=a > nadomo=a > nadoma > nada

2人称単数のンナ、ワ、コナタについては、

トピックの助詞 =a が付いてでき上がったのではなく、もともと-aの母音をもっていたいが、形式上、A形に入れておく。

海士町方言の人称体系

	1人称	2人称(非尊)	2人称(尊)
		2人称(尊)	
単数A形	オラ	ンナ	ワ
	コナタ		
複数A形	オラドマ	ナドマ	ナダ、ウドマ
単数非A形	オレ		
複数非A形	オラドモ	ナドモ	ナド、ウドモ
	コナタシ		

【アスペクト形式ヨル】

海士町方言が他の能登方言と異なる点として、海士町方言で用いられるアスペクト形式のヨルをあげる。アスペクトとは、「運動動詞の時間的展開段階の捉え方」(工藤真由美 2004)をいうが、ここで扱うのは、ヨル形が動作の進行を表しており、結果を表すトルとちがいがあることである。こうしたヨルとトルの対立は、中四国・九州の西日本に広くみられるが、石川県では海士町だけに認められるものである。ただし、海士町では、進行を表すのにもトルを用いることができ、ヨルとの併用になっている。

海士町方言のヨルとトル

標準語	能登	海士町
戸が開いている(結果)	開いテイル	開いトル
戸を開けている(進行)	開けテイル	開けトル、開けトル

日本放送協会編『全国方言資料』(CD-ROM版 1999年)に収録されている「石川県輪島市海士町(1962年9月収録、話者1905年生女性、1904年生男性)の談話にもヨル形とトル形の両方がみられる。

女: ワーモ エマ アガッテ ミナ
ノミヨルシー ハー エPPER
(あなたも今上がって、皆で飲んでいるし、はあ一杯)
男: アー ホンナラ マーヨーデ クサレ
(ああそれならまあ、ごちそうしてください)(172頁)

女: アー ツズクルケアーノー
(ああ(網を)つくろっているんですね。)
男: ア ツズクットル オリヤー テアー
ソーデ モー ドーモナラン
(ああつくろっている、おれは。たいへ

んで、もう どうにもならない。)(166頁)

さらに調査が必要だが、ヨルは1人称の動作には使用できないという人称制限があり、証拠性のムードを帯びている可能性がある。沖縄のウチナーヤマトグチ(沖縄共通語)のヨル(実際にはヨッタの形しかないが)は話し手が直接目撃したものを伝える形式で、それゆえ話し手の動作、変化を表すことができないとされる(高江洲頼子 2004: 317)。海士町のヨルの用法と類似点をさらに精査する必要がある。

【海士町のルーツ問題】

系統的が不明の二つの言語が、系統的に同じどうか調べるためには、音の対応関係や文法の類似性など多くの点について検討が必要である。しかし、ある民族が移住によって母村を離れて移住先で定住した場合に、母村と移住先の関係が推定どおりか、言語を使って調べるのは比較的容易である。石川県輪島市海士町とその母村と目される宗像市鐘崎は、700kmも離れている。海士町と鐘崎が共通の単語をもち、この間の本土の方言の中に、類似した語形の連続分布がなければ、それは移住によるものと判定してよい。なぜなら、700kmも離れたところに、同じものを同じ名前読んでいた偶然の可能性は大変低く、後の時代に外からもたらされたものと考えてよいためである。

ここでは、海士町民が鐘崎からやって来た証拠となり得る事項、「つらら」「あざになる」について取り上げ検討した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

(1) 新田哲夫「5 言語」『海女習俗詳細調査報告書(石川県)』, 2016年, 245-252.(査読無)

〔学会発表〕(計 2件)

(1) 新田哲夫「輪島市海士町のことば: 移住と変化」金沢大学人文学類シンポジウム 2014, IT ビジネスプラザ武蔵(金沢市), 2014.12.20.

(2) 新田哲夫「輪島市海士町の言語とルーツ問題」第3回石川県海女習俗緊急調査執筆委員会(石川県庁), 2015.5.29.

〔図書〕(計 2件)

(1) 岩崎才吉・新田哲夫「輪島市海士町・舩倉島のくらし」(金沢大学人文学類) 2015.

(2) 岩崎才吉・新田哲夫「輪島市海士町のことば 語彙と用例集」(金沢大学人文学類) 2016.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新田哲夫 (NITTA, Tetsuo)
金沢大学・人間社会研究域歴史言語文化学系
教授

研究者番号：90172725

(2) 研究分担者

木部暢子 (KIBE, Nobuko)
人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異
研究領域教授

研究者番号：30192016

(3) 研究分担者

久保智之 (KUBO, Tomoyuki)
九州大学・人文科学研究科 (研究院)・教授

研究者番号：30214993